

# 岩永 理奈

助教 総合研究部看護学講座(看護教育)



看護師不足が深刻化する中、特に新人看護師の職場適応は重要な課題となっている。新人看護師は、知識や技術の習得とともに、職場環境や人間関係に適応するプロセスを経験する。しかしながら、この過程においてストレスを感じる場面も多く、長期間ストレスにさらされると離職意図につながる。そのため、職場適応を支える力が重要であり、その中でも特に「レジリエンス」という概念に注目が集まっている。

レジリエンスとは、個人や集団が困難に対処しながら成長する力であり、従来は個人の資質として捉えられてきた。一方、近年では、環境との相互作用の中で培われる学習可能な能力としても認識されるようになってきている。また、新人看護師がこの能力を維持・向上させるためには、個人だけでなく、組織の支援も関与していることが示唆されている。

以上より、新人看護師の適応を支える要因についてさらなる研究が必要である。

## KEYWORDS

- 新人看護師
- レジリエンス
- 職場環境
- 職場定着

## SEEDS

- 新人看護師への教育支援

## NEEDS

- データ収集と分析の力
- データサイエンス分野との連携(データ解析モデルの作成)
- 臨床現場との連携

# 高岡 智子

助教 総合研究部看護学講座(母性看護学)

骨盤底筋訓練(Pelvic Floor Muscle Training;PFMT)は産後の重要な指導項目であるが、PFMTの評価指標となる骨盤底筋の収縮力を測定する機器が産科には備わっていないため、その評価が難しい。

近年、骨盤底の解剖・機能の評価に超音波診断法(エコー)が用いられ始め、骨盤底領域の診療にエコーを活用する場面が増えつつある。本研究は、エコー画像上の測定値から骨盤底筋の収縮力をとらえられないかを検討し、判定の基準値の策出を目指す。本研究により、産科に備わるエコーを活用して骨盤底筋の収縮力を客観的に評価可能になり、評価を取り入れたより実用的なPFMTの提供が実現できる可能性がある。

## KEYWORDS

- 骨盤底筋
- 筋力
- 超音波検査
- 信頼性妥当性

## SEEDS

- 経会陰エコーを用いた骨盤底筋の評価

## NEEDS

- 画像を最適化するためのエコーの調整に関する知識・技術



## 佐々木 美果

助教  
総合研究部看護学講座(母性看護・助産学)

妊婦をとりまく背景は複雑化し、様々な要因により子育ての困難が予測される社会的ハイリスク妊婦が増加している。そのため母子保健に関わる専門職は、妊婦の様子から社会的ハイリスク妊婦の可能性を抽出し、多職種と連携を行いながら支援を担う役割がある。

本研究は、妊婦と接する機会が多い母子保健の専門職である助産師および保健師が、どのような視点から社会的ハイリスク妊婦を抽出し、多職種と連携しながら支援につなげているかを明らかにすることを目的としている。助産師および保健師の社会的ハイリスク妊婦を抽出するプロセスや多職種との連携を明らかにすることにより、継続した育児支援システムの構築を目指す。

### KEYWORDS

- 社会的ハイリスク妊婦
- 特定妊婦

# 寺田 あゆみ

助教 総合研究部看護学講座(在宅看護学)

高齢者の生活の場として増加傾向にある住宅型有料老人ホーム(以下、住宅型ホーム)において、医療職の配置が制度上義務化されていない中での看取りケアの充実を目指し、以下の段階で研究を進めています。

1. 看取りケアに直接関わる介護職が直面する課題の特性を捉えること。
2. 介護職と連携する看護師の課題を見出し、さらに多職種連携の課題についても考察すること。
3. 得られた結果を基に在宅型ホームにおける看取りに対する支援システムの改善を検討し、それを広く普及させること。

## KEYWORDS

- 看護
- 有料老人ホーム
- 高齢者
- 看取り
- 介護職
- 多職種連携



# 小林 康江

教授 総合研究部看護学講座(母性看護・助産学)

Step1:2012年から5年間、ローリスク妊産婦に対して妊娠期から産後2か月まで自立して継続ケアが提供できる助産師の育成を目指す卒後教育プログラムの構築を行った。この中では、毎月、事例検討会を実施し、新人助産師の臨床判断能力の獲得状況の検討を行った。

Step2:現在もStep1のプログラムに準じた卒後教育を受け、妊娠初期から産後2か月まで継続して受け持ち、助産ケアを提供する助産師の卒後教育に関わっている。コクラン・レビュー「妊娠・出産する女性への助産師主導の継続ケアモデルと他のケアモデルとの比較」において、「助産師主導の継続ケア」を受けた女性は、正常分娩になる割合が高く、ケアの満足度が高いことが報告されている。

そこで2022年から、「助産師主導の継続ケア」を実践している助産師が獲得している能力は何か、その能力はどのように獲得されるのを明らかにする研究を行っている。

本研究の成果が得られれば、助産ケアの件数によらない、助産師が獲得するコンピテンシーを提示できると考える。

## KEYWORDS

- 助産師教育
- 助産師主導の継続ケア

## SEEDS

- 事例検討会の開催

## Step1

2012～2017年  
助産師の卒後教育プログラムの構築と実施

## Step2

2022～現在  
「助産師主導の継続ケア」を実践している助産師が獲得している能力の明確化

# 赤池 大貴

助教 総合研究部看護学講座(基礎看護学)



## KEYWORDS

- 脊柱変形
- 転倒
- 転倒リスク評価
- ウェアラブルセンサー

## SEEDS

- 転倒リスクアセスメントの運用とその評価手法

## NEEDS

- 転倒予防に関するICT技術の活用
- 転倒予防におけるリスク評価ツールの共同開発

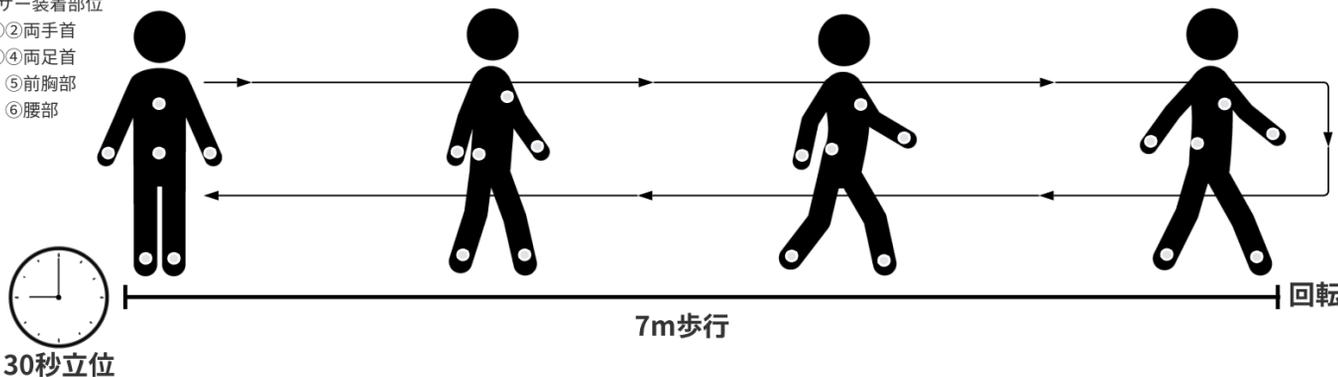
高齢化に伴い、基礎疾患として脊柱変形を有する患者が増加しています。脊柱の変形は転倒の要因となり、転倒予防は、高齢化社会における重要課題の一つとなっています。

医療現場で活用されている従来の転倒リスクアセスメントツールでは、歩行機能やバランス障害の評価に限界があります。そこで、ウェアラブル慣性センサーを装着した下図の歩行試験 (ISAW: The Instrumented Stand and Walk Test)を行い、歩行やバランス機能の特徴を定量化することで、転倒リスクアセスメントツールに脊柱変形による転倒リスクを反映させるための基礎データを集積したいと考えています。

脊柱変形に限らず、他の疾患群やリハビリテーション分野への幅広い応用を目指しています。

センサー装着部位

- ①②両手首
- ③④両足首
- ⑤前胸部
- ⑥腰部



揺れ(Sway)

- S-重心周波数 (Hz)
- S-加速度の変化率 ( $m/s^3$ )
- S-ベクトルの速さ (m/s)
- S-冠状面での二乗平均平方根 ( $m/s^2$ )

予測的姿勢調整  
(APAs: Anticipatory Postural Adjustments)

A-横方向の最大加速 ( $m/s^2$ )

歩行(Gait)

- 歩行：時間的(Temporal)
- G:T-歩幅時間 (s)
- G:T-両足支持時間 (%)

- 歩行：空間的(Spatial)
- G:S-速度 (m/s)
- G:S-歩幅長 (m)

回転(Turn)

- 歩行：変動性(Variability)
- G:V-歩幅時間の変動係数
- G:V-歩幅長の変動係数
- G:V-側方歩幅の偏差 (cm)

- 歩行：上半身(Upper Body)
- G:U-冠状面のROM (度)
- G:U-矢状面のROM (度)
- G:U-上腕のROM (度)

- T-ターンが完了するまでの時間 (s)
- T-回転速度 (度/s)

# 倉本 直樹

講師 総合研究部看護学講座(基礎看護学)



## KEYWORDS

- 技術
- 末梢静脈穿刺
- ・ 点滴
- ・ 採血
- 駆血

## SEEDS

- エコーを用いた末梢静脈の測定
- 手指の動作解析

## NEEDS

- 属人的な技能、技術を解明し、伝承、伝達する取り組みで、協働・連携させて頂きたいです。

- ▶ 採血・点滴等の末梢静脈を穿刺する技術は、属人的で個人差が大きく、一度で成功しないことも多い。
- ▶ 穿刺の失敗は、苦痛だけでなく、資源の損失、治療の遅れも招く。
- ▶ 採血・点滴時の失敗を減らすため、熟練の技術の解明を目指す。

### 効果的な駆血方法の検証

#### 筋ミルキング原理を応用した駆血法の評価

駆血する上腕筋の筋ミルキング効果を応用した駆血法を提案し、エコーを用いて、静脈の深さと太さの検証を行っております。

EFFECT OF TOURNIQUET BASED ON MILKING TECHNIQUE ON PERIPHERAL VEIN DILATATION  
ICN Congress 2023 @ Montreal

Watanabe, Yoriko., Kuramoto, Naoki., Koseki, Yoshihiko., Yamashita, Juli., Yoshinaka, Kiyoshi., Takano, Jun.

### 熟練者の血管を触診する技術の解明

#### 目視できない静脈を触診する動作の客観化

熟練看護師の触診技術を客観化するために、指が接触の力および位置の解明を行っております。

目視できない末梢静脈血管路を選定する熟練看護師の触診技術の解明 (21H05830)

科学研究補助金 学術変革領域(A)「実世界の奥深い質感情報の分析と生成」公募研究

研究代表者: 渡邊順子

研究協力者: 倉本直樹, 山下樹里, 小関義彦, 葭仲潔



## 霜越 多麻美

准教授 総合研究部看護学講座  
(公衆衛生看護学、地域・在宅看護学、  
国際保健・看護学)

R5年度まで科学研究費助成事業(若手研究)にて組織学習に着目した地域組織活動の支援に関する研究を実施した。この研究を通じて、保健推進員や母子愛育会などの地域組織活動は、高齢化やなり手不足が深刻になり、さらに新型コロナウイルス感染症による活動の中止や停滞が続き、より多くの自治体で活動継続が難しい状況に直面していることが明らかとなった。今後の活動のあり方を考える転換期にあることが示された。自治体によっては社会福祉協議会など他組織の協働により、健康づくりと地域づくりを一緒に進める工夫が示されている。今後、さらに地域では高齢者が増え、日中に健康づくりや地域づくりのなり手が不在になる中で、保健師やそのほかの関係組織が連携しながら活動を支援していくことが必要ではないかと考えている。

過去においてはバングラデシュ、ベトナムで母子保健・リプロダクティブヘルスを中心とした地域保健活動と地域組織に関する研究を行った経験から、海外における同様の研究等も検討中である。

### KEYWORDS

- 健康づくり
- 地域づくり
- 地域組織
- 住民参加
- 人材育成

### SEEDS

- 質的研究
- 異文化理解

# 武井 勇介

助教 総合研究部看護学講座  
(公衆衛生看護学、地域看護学)



## KEYWORDS

- 産後うつ病
- 母親のメンタルヘルス
- 保健師
- インストラクショナルデザイン

## SEEDS

- eラーニング
- インストラクショナルデザイン

## NEEDS

- 保健師現任教育
- 教育プログラムの開発

### ■研究概要

産後うつ病は、産後の母親の10～15%が発症し、妊産婦の自殺や児童虐待とも関連するなど、社会的問題となっています。これまで、産後うつ病を予防するためには、出産後の支援が重要と考えられてきましたが、近年では、妊娠期からの予防の重要性が指摘されています。しかし、産後うつ病を予防するために必要な妊婦への教育や指導は自治体独自で取り組まれており、その具体的な内容や効果は明らかにされていない現状があります(図1)。

#### これまでの研究成果からの課題

- ▶ 母親を支援する体制や連携方法は、各自治体に任せられている
- ▶ 産後うつ病の対策は産後を中心とし、妊娠期の取り組み実態は明らかではない
- ▶ 妊娠期から産後うつ病の支援体制や予防的介入が求められている
- ▶ 産後うつ病の認知度が低く、母自身の知識や教育体制が不十分
- ▶ 専門職の支援技術向上や効果的な教育内容が求められている

図1 これまでの研究成果から、本研究への着想

### ■本研究の目的

本研究では、産後うつ病を予防するための、妊婦に対する教育プログラムの開発とその効果を検証することを目的としています。

### ■本研究の構成

本研究は、以下の3つで構成しています。

- ①基礎調査
- ②教育プログラムの開発
- ③教育プログラムの実施・評価

### ■本研究で用いるインストラクショナルデザインとは？

本研究の教育プログラム開発にあたっては、インストラクショナルデザインの基本的モデルの、分析(Analysis)、設計(Design)、開発(Development)、実施(Implementation)、評価(Evaluation)の要素で構成されているADDIEモデルを用いています(図2)。

インストラクショナルデザインとは、教育の効果・効率・魅力を高める手法として、医療分野でも着目され、高い学習効果が認められている体系的な手法となっています。

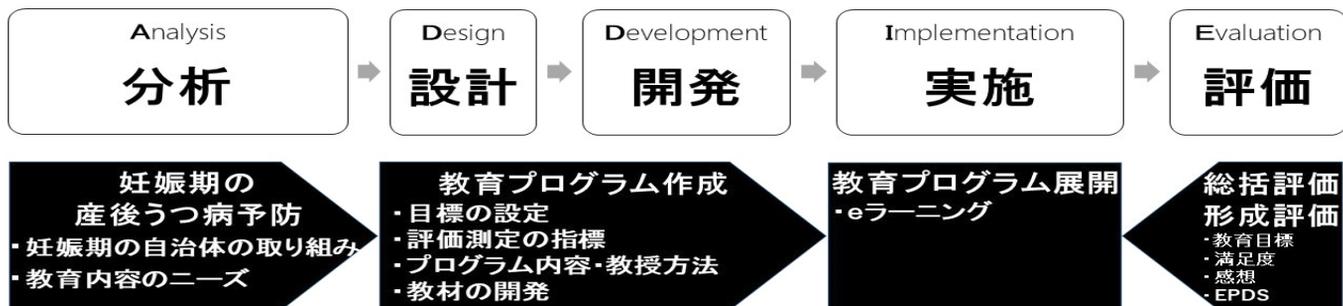


図2 ADDIEモデルも用いた本研究の枠組み

# 牧野 公美子

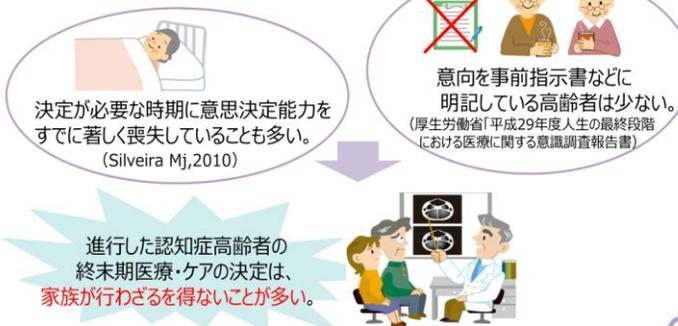
准教授 総合研究部看護学講座  
(高齢者看護学)



## 研究の概要:

高齢者の終末期医療・ケアの決定は治療方法の選択にとどまらず、人生の締めくくりとなる時期を、どの場所でのどのように生きるかという意味を含有する重要な選択となります。高齢者本人の意思を尊重するため、個々の高齢者の意思決定能力を適切に評価し、保持する能力を最大限引き出す支援が改めて重要視されています。

## 【研究背景】



- ・医療に伴う代理意思決定において、**家族が大きな精神的負担を負っている。**  
(Wendler D,2011 : Systematic review )
- ・医療行為に**高齢者本人の意思が反映されにくい。**  
➡ 過剰もしくは過小医療につながっている。

## KEYWORDS

- 代理意思決定
- 認知症高齢者
- 家族
- 看護支援
- 終末期医療

## SEEDS

- 量的・質的調査
- 認知症ケアに関する研修会

## NEEDS

- 介護施設における認知症ケアおよび看取りケアに関心をもつ方との共同研究を希望しています。

他方、終末期医療・ケアを決定する際、高齢者が理解や判断、表明する能力をすでに著しく低下・喪失している状態であることも多く、さらに、終末期医療・ケアに対する意向を事前指示書などに明記している割合も少ないことから、進行した認知症高齢者の終末期医療・ケアの決定は家族等が行わざるを得ないことが多いという現状があります。

ナーシングアドボカシーは、認知症高齢者が多く入所する介護施設で働く看護師にとって、終末期医療・ケアの決定場面において果たさなければならない重要な役割の1つですが、家族等と医療・ケアチームが合意形成する過程において、看護は何をすべきか、その問いに答える営みは模索が続いています。これらのことから、高齢者の本人意思を尊重する、且つ、家族等が後悔のない納得できる終末期医療・ケアの選択を支える看護実践を探求しています。

## 研究の詳細:

介護老人福祉施設(以下、特養)に入所する認知症高齢者の終末期医療・ケアに関する代理意思決定支援に注目した質問紙調査と面接調査等を行いました。

遺族調査<sup>1,2)</sup>からは、i)これまで未解明であった施設内看取りを最終決定した家族が満足 of いく看取りに至るまでの一連の過程と、ii)その過程で経験する精神的負担、iii)代理意思決定に対する想いとそれに影響する要因が明らかになりました。また、看護師調査<sup>3)</sup>からは、特養において数少ない医療専門職であり代理決定者の家族に直接的に関与する機会が多い現場の看護師に対して、経験豊かな看護師が行っている実践知を概念として要約し提供することができました。

他方で、研究の限界として、i)対象抽出の結果として家族が二親等以内で、高齢者ととともに暮らした経験のある者に限定されていた点、ii)施設職員の面接が看護師に限定されていた点等がありました。そこで、「家族」以外の者が代理決定者になるケースなど対象を拡大した研究、あるいは、看護師と他職種との連携の様相を解明する研究に着手しています。

## 主な研究成果:

1)牧野公美子、杉澤秀博、白柳聡美:施設内看取りを代理意思決定し看取る過程で家族が経験した精神的負担と代理意思決定に対する想い-介護老人福祉施設に入所する認知症高齢者の家族の場合-、日本老年看護学会誌、25(1)、97-105、2020。【日本老年看護学会 研究論文賞受賞】

2)牧野公美子、杉澤秀博:認知症高齢者の終末期医療と看取り場所を最終決断した遺族の代理意思決定に対する「満足感」と「後悔」に関連する要因-介護老人福祉施設で行われた看護支援に着目して-、老年学雑誌10、82-97、2020。

3)牧野公美子、杉澤秀博、白柳聡美:満足 of いく施設内看取りの決断ができた家族に対して看護師が行っていた代理意思決定支援-介護老人福祉施設において認知症高齢者を看取った家族の場合-、老年学雑誌12、15-31、2022。

# 牧野 公美子

准教授 総合研究部看護学講座  
(高齢者看護学)



## KEYWORDS

- 臨床試験
- 被験者
- 臨床研究コーディネーター
- 看護師

## SEEDS

- 看護研究の支援
- モニタリングの実施・支援
- ・ 特定臨床研究
- ・ 倫理指針

## NEEDS

- 臨床研究看護に関心をもつ方との共同研究を希望しています。

### 研究の概要:

新規の医薬品や医療機器開発、手術方法等の安全性や有効性を検証する臨床試験の実施には患者の参加が不可欠です。臨床試験は、参加する患者本人の「治療」として実施されるのではなく、あくまでも新たな医療開発や適応拡大のため(将来の患者に役立てるため)に実施される「研

究」となります。従って、臨床試験に参加する患者は、研究の目的や内容、リスクと利益等の情報提供を受け、十分に理解した上で、自由意思で臨床試験への参加・継続を決定することが重要になります。このように、患者は臨床試験への参加から試験終了に至るまでの様々な段階で意思決定を迫られ、その意思決定を含めて、臨床試験チームは臨床試験の全プロセスにわたり患者を支援していく必要があります。

臨床試験を支えるチームメンバーは多職種で構成されており、臨床試験チームにおける看護師の立場には2つあります。1つは、看護師が「臨床研究コーディネーター」と呼ばれる研究支援専門職として参加する場合(以下、

看護師CRC)で、もう1つは、病棟や外来等で参加患者をケアする「臨床看護師」です。看護師CRCと臨床看護師はどちらも患者にとって身近な医療専門者であり、権利擁護の役割を担っています。双方が専門知識・技術を活用し、被験者を積極的に看護することは、質の高い臨床試験に大きく貢献するものとして期待されていますが、日本における臨床研究看護は発展途上にあるといえます。臨床試験が増加するなかで、臨床試験に参加する患者を支える看護に関する研究は極めて少ない現状です。これらの背景から、患者中心の臨床試験を実現するうえでの看護、特に看護師CRCと臨床看護師の協働のあり方について探求しています。

### 【研究背景】

- ・自分の病気に対して有効性が明らかになっていない試験薬(あるいは、薬理学的活性のないプラセボ)の使用
  - ・臨床研究上の制約による使用可能薬剤の限定
  - ・未承認薬を服用するために予測できない副作用の出現
- などの可能性がある



患者は臨床試験への参加から試験終了に至るまでの様々な段階で意思決定を迫られる。

### ＜参加患者の権利擁護の役割を担う看護師の立場＞

#### 臨床研究コーディネーター (看護師CRC)

- ▶ 臨床研究部に所属する研究支援専門職。すべての関係者の調整役。



#### 臨床看護師

- ▶ 看護部に所属し、病棟や外来において参加患者をケア。

双方が専門知識・技術を活用し、参加患者を積極的に支援することは、**患者の安心・納得した臨床試験参加、質の高い臨床試験**に大きく貢献するものと期待。

## 臨床試験に関わる主な研究成果

- ① 牧野公美子, 五十公野由起子, 秋元美佐枝, 牧田美佳, 佐藤直美: 臨床試験プロセスにおける被験者の体験と想い-高齢被験者に着目して-, 日本臨床試験学会第15回学術集会(2024年3月7-9日), 大阪。
- ② 五十公野由起子, 牧野公美子, 秋元美佐枝, 牧田美佳, 佐藤直美: 臨床試験プロセスにおける被験者の体験と想い -成人期の被験者に着目して-, 日本臨床試験学会第15回学術集会(2024年3月7-9日), 大阪。
- ③ 牧野公美子, 五十公野由起子, 秋元美佐枝, 牧田美佳, 佐藤直美: 被験者らの視点から臨床研究看護のあり方を探る国内研究の動向と概要, 日本臨床試験学会第13回学術集会総会(2022年2月4-5日), 東京。
- ④ 秋元美佐枝, 牧田美佳, 牧野公美子, 五十公野由起子, 佐藤直美: 臨床看護師及びCRCを調査対象とした臨床試験に関する国内研究の動向と概要, 日本看護研究学会第26回東海地方会学術集会(2022年3月5日), 誌上発表。
- ⑤ 国立研究開発法人日本医療研究開発機構「研究開発推進ネットワーク事業」の令和3年度成果物 4. 研究の信頼性確保「治験及び臨床研究におけるQuality by Designの相違調査と求められる体制整備統一方法論の確立」, 分担研究者(研究代表者: 梅村和夫) <https://www.amed.go.jp/program/list/16/01/013.html> (最終更新日2024.7.1)
- ⑥ 大村知広, 小田切圭一, 中村美詠子, 鈴木千恵子, 牧野公美子, 乾直輝, 梅村和夫: 非臨床研究中核病院を対象としたQuality by Designの実装調査-Quality by Designの実装における医師、PMの重要性と支援リソースを補完する手順書の作成, 第43回日本臨床薬理学会学術総会(2022年11月30-12月3日), 横浜。
- ⑦ 大村知広, 小田切圭一, 中村美詠子, 鈴木千恵子, 牧野公美子, 乾直輝, 梅村和夫: 非臨床研究中核病院へのQuality by Design進捗度調査で判明した研究計画書の科学的妥当性のレビューと人的リソースの関連性, 第6回日本臨床薬理学会 東海・北陸地方会(2022年7月30日), WEB。
- ⑧ 牧野公美子, 蛭田桂, 金原義弘, 坪田裕美, 鈴木千恵子, 小田切圭一, 梅村和夫: モニタリング報告書から読み解く特定臨床研究実施の注意点, 日本臨床試験学会第12回学術集会総会(2021年2月12-13日), WEB。

## 野口 彩花

助教 総合研究部看護学講座(高齢者看護学)



## KEYWORDS

- 放射線皮膚炎
- 失禁関連皮膚炎
- スキンケア

## NEEDS

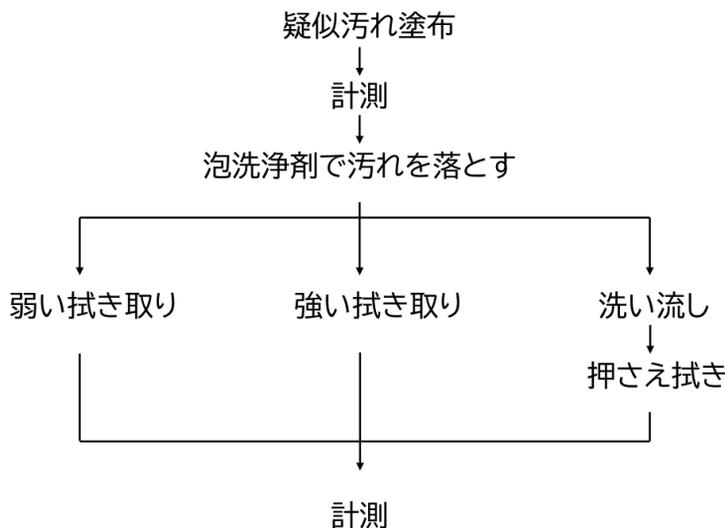
- 疑似汚れや人工皮膚
- 拭き取りや洗浄時にかかる皮膚へ負担の測定技術
- 汚れ落ちを評価する技術など

## 研究の概要:

放射線皮膚炎や失禁関連皮膚炎など皮膚障害の予防や症状出現時の対症療法として、スキンケアは重要です。臨床では、拭き取り使用も可能な清拭・洗浄料や陰部清拭用ワイプシートなど新たな製品の開発により、これまでの泡立てて愛護的に洗うこと、十分なすすぎを行うこと、拭き取る際は押さえ拭きをするといった洗浄方法ではなく、拭き取りでケアをする場面が増えてきています。これらの使用により、従来方法に比べてケア時間の短縮にもなること、洗い流しにくい部位への使用ができるなど良い点もあると考えます。

しかしながら、放射線皮膚炎や失禁関連皮膚炎等の皮膚障害を生じた場合は、治療のために薬剤の塗布も行われます。正常な皮膚であれば、拭き取りでの対応でも良いかもしれませんが、正常な皮膚よりも脆弱な皮膚状態であること、かつ油分を含んだ軟膏などを塗布している状態の皮膚においても、拭き取る方法で皮膚の清潔を保つことが出来るのか疑問視されます。これらのことから、放射線皮膚炎や失禁関連皮膚炎などの皮膚障害のある皮膚のスキンケアについて探求しています。

## 実験手順



## 研究の詳細:

人工皮膚に軟膏処置を想定した疑似汚れを塗布し、拭き取り使用も可能な泡洗浄剤で洗浄後、①微温湯で洗い流す場合と②拭き取る強さを変えて拭き取りを行った場合とで、疑似汚れの落ち具合に差が出るか検証を行いました。この検証の結果では、洗い流しよりもある程度の力を加えて拭き取った方が汚れは落ちる可能性が示唆されました。

今後は、同様の実験を正常な皮膚で行う研究を構想しています。

## 学会発表:

野口彩花: 泡洗浄剤を用いた洗い流しと拭き取りによる皮膚汚れ除去の違い、第23回山梨大学看護学会学術集会(2023年11月11日)、山梨

# 眞嶋 ゆか

講師 総合研究部看護学講座(母性看護・助産学)

## 研究内容の紹介:

新生児の殿部を清拭する時は、指でおしりふきを把持して拭きます。その時の皮膚に対する指腹部の接触力を測定し(①)、接触力の程度で皮膚バリア機能がどのように変化するのか(②)を調査しています。新生児のおむつ皮膚炎を予防に向けて、拭き方に着目して研究を進めており、本研究はその中の1つのステップになります。

## KEYWORDS

- 清拭
- 接触力
- 経表皮水分蒸散量

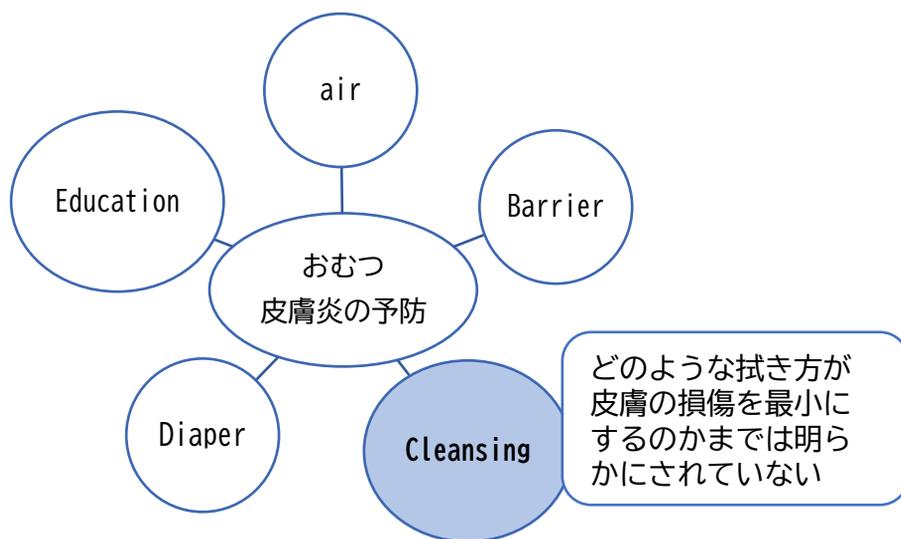
## SEEDS

- スキンケア
- 母性看護学・助産学に関すること

## NEEDS

- 皮膚の摩擦に関連する助言

### おむつ皮膚炎予防のABCDE



①20代女性を対象に、自分の前腕と皮膚モデルをおしりふきで拭き、その時の接触力を測定しました。  
測定は、触動作センサHapLog®を使用しました。

②①および先行研究を基に、異なる接触力で皮膚を拭いた時の皮膚バリア機能を調査します。

接触力を一定に保つため、触動作センサHapLogを研究者が装着して、対象者の皮膚を拭きます。

その後、一定の時間で皮膚バリア機能(TEWL(経表皮水分蒸散量)、紅斑値)を測定し、その推移を調査します。

# 宮村 季浩

教授 総合研究部看護学講座(保健学)



## KEYWORDS

- 認知症
- 嗜好
- 食べ方

## SEEDS

- テキストデータの定量化

### 研究開始時の研究の概要

認知症の人は、何がおいしいのか上手く伝えることが難しくなる。それまでの好物をおいしいと感じるとは限らない。さらにおいしさの判断には、味や香りよりも、見た目や食べる雰囲気の方が強い影響をおよぼしている可能性がある。認知症の人に聞いても何がおいしいのか正しい情報が得られない中で、多くの介護者が認知症の人の「食べ方」の変化を、食事に満足しているかなどについて判断する指標として介護に生かしている。本研究は、認知症の人が食事に満足しているかどうかをこの「食べ方」の変化で評価することを目的とする。

### 研究実績の概要

本研究は、認知症の人が食事に満足しているかどうかを「食べ方」の変化で評価することを目的とする。調査対象は介護施設の介護職員とし、食事介助の「食べ方」についてチェックリストを用いて確認してもらう。チェックリストは、特定の食べ物を食べないなどの「好き嫌い」、よく噛まずに飲み込む、口の中の食べ物をなかなか飲み込まないなどの「噛み方」、食べる意欲がない、口から食べ物を出すなどの「食べ方」、食べる時間が長いなどの「食べる時間」についてそれぞれ5段階で評価してもらい、同時に食事の状況、誰とどのようにして食べたかについても記録してもらう。同時に認知症に人の行動や精神心理的な状態については介護記録から情報を得る。解析にはテキストデータ分析のための解析ツールやAIを用い、テキストデータから可能な限り客観的な結果を導き出す。以上より得られた「食べ方」や食事の状況、認知症の人の状態、そしてその時のメニューから関係を明らかにし、食事に対する満足度を「食べ方」で評価できるか検証していく予定である。

また、調査の過程で認知症の人との共食について、高齢になると一緒に食事をする人たちを不快にしないための食事マナーを守ることが難しくなるが、それを子どもや孫の世代は我慢しなくてはならないという社会的な制約があり、特に家族と同居している高齢者の共食は、家族の我慢で支えられている部分が少なくないことが明らかになり、今後、引き続き検討していく必要があると考える。これに関連して、高齢者の共食の問題点について山梨大学看護学会誌21巻1号(2022)に発表した。

# 神崎 由紀

教授 総合研究部看護学講座(公衆衛生看護学)



## KEYWORDS

- 地域在住高齢者
- 社会的孤立
- 見守り
- 保健師

## SEEDS

- LOVOTの貸し出(時期による)

### 研究の概要

社会的に孤立している高齢者はその特性や生活背景から孤立を防ぐことは難しく、いかに健康や生活上の危機を予防する支援ができるかが課題といえる。

こうした高齢者は、地域包括支援センター等により支援されてきているが、高齢者の積極的な介入を望まない特徴や感染症対策が必要な状況下で、より安全かつストレスが少ない形で支援する方法が探索できないかと考えた。

### 研究目的

本研究では、家族型コミュニケーションロボットを活用した見守りにより、社会的に孤立した高齢者の心理的な影響と看護職が健康状態をどこまでアセスメントできるかを明らかにし、社会的に孤立した高齢者の健康危機を予防するための支援モデルを作成することを目的とする。

### 研究実績の概要

本研究の目的は、地域包括支援センターの看護職が継続した見守りが必要だとアセスメントした社会的に孤立した高齢者を家族型コミュニケーションロボットを活用して見守ることによる、高齢者への心理的影響と、看護職が高齢者の健康状態や生活状況をどこまでアセスメントできるのかを明らかにすること、これらにより社会的に孤立した高齢者の健康危機を予防するための支援モデルを作成することである。

家族型コミュニケーションロボットを実際に使用し、使用方法や使用上の課題の抽出を行った。

実際の見守り方法と観察項目等を検討することはできたが、機器のトラブルに対応できる家族と同居する高齢者への試用を行う予定であったが、協力者の確保ができず実際の試用は今後の課題である。



# 谷口 珠実

教授 総合研究部看護学講座  
(成人・高齢者看護学、排泄看護学)

## 研究の目的

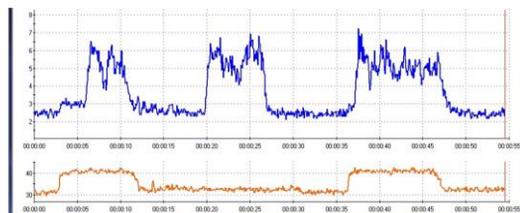
高齢者のフレイル予防で実施する集団骨盤底筋訓練の適切な指導の根拠 となる基礎的データの知見を得て、医療機関以外で行う集団骨盤底筋訓練に最適な指導方法について提言することである。

## 研究の背景

これまで研究者は病院や在宅療養の臨床現場において、尿失禁や骨盤臓器脱などの症状を有する対象者に対し個別に骨盤底筋訓練を指導し、高齢者でも症状が改善できることを報告してきた。臨床現場で個別指導を行う際には、直接外陰部を診察し会陰の状況を観察して、会陰部の触診や機器類を用いた筋肉の動かし方や収縮力の評価に関する指導を行うことで成果に至っていた。しかし、高齢者の集団指導の場においては、これまでのように会陰部を直接診察し触診する等の指導方法を実施することはできない。対面に限らずテレビ等のメディアを通じた骨盤底筋訓練の指導においても同様の問題が生じる。そこで、同じ骨格筋である下肢筋力と、骨盤底筋の筋肉訓練の前後変化、骨盤底筋と関連する可能性の高い腹横筋との関連性について、分析して基礎データを得ることで、フレイル予防事業で実施する骨盤底筋訓練の集団指導に応用するための提言を行いたいと考えて研究に取り組んでいる。

## 研究の概要

1. 第一段階は、尿失禁を有する高齢者のフレイル群と非フレイル群の各20名に対して骨盤底筋訓練の指導を行い、その際にマイオトラック3を用いた筋電図評価を行う。
2. 第二段階の観察研究では、骨盤底筋訓練の治療が必要な有症状がある高齢患者（フレイル群と非フレイル群）と成人期患者を対象に、骨盤底筋群と腹横筋の関係性の分析を行う。
3. 上述の第一段階の観察研究と第二段階の観察研究から、高齢者の集団指導時に応用できる知見について、医療の専門家を集めて会議を行い提言をまとめている。



(左)マイオトラック3を用いた筋電図測定の一例

(右)マイオトラック3を用いた骨盤底筋訓練のバイオフィードバック指導

## 現時点での研究結果

現在、骨盤底筋と同じ骨格筋である下肢筋力に着目し対象者を分析後、骨盤底筋訓練の筋肉訓練の前後変化と骨盤底筋と関連する可能性の高い腹横筋の測定を開始している。

骨盤底筋訓練開始時の骨盤底筋と腹横筋の測定を最初に分析しており、幾つかの動きのパターンが示されることが明らかになった。

本研究前には、欧米での健常な若年者での測定結果しか示されておらず、関連する筋肉の動きの報告があるが、高齢女性のデータからは、これまでの報告とは異なる動きのパターンが示されている。

## 学会発表

1. BF(バイオフィードバック)療法の概説:フィードバック療法とBF療法の機器を用いた評価の利点と欠点の概説<筋電測定方法を含む>、第23回日本女性骨盤底医学会 招待講演、2021
2. 更年期・老年期における骨盤底機能障害を守るケア2021、看護薬理学カンファレンス 招待講演、2022
3. 高齢者のフレイル予防と排泄の課題 第34回日本老年泌尿器科学会 招待講演、2021
4. 高齢女性の骨盤底筋訓練開始時の骨盤底筋群と腹筋の筋電図評価、日本老年泌尿器科学会、2023
5. 骨盤底機能障害を有する高齢女性の骨盤底筋訓練時の骨盤底筋群と腹横筋の筋力評価、日本排泄機能学会、2024

## KEYWORDS

- 骨盤底筋訓練
- 筋電測定
- 高齢者
- 集団指導方法
- フレイル予防

## SEEDS

- 骨盤底筋訓練
- BF療法の指導

## NEEDS

- 骨盤底筋の運動を測定する用具